

# フッサールにおける科学の方法の問題

鈴木康文

## 序

フッサールにおいて精密な数学的自然科学のあり方は、この自然科学を遂行する態度である自然主義的態度や自然科学に対する自己理解としての自然主義的哲学の問題とからんで、彼の思想の中でも早くから論議されてきた。例えば、一九一一年に発表された『厳密学としての哲学』においては、当時趨勢を誇っていた自然主義哲学や歴史主義の批判を通じて現象学の学的位置づけを試みている。そのなかで自然主義は、自然を「時空的存在が精密な (exakt) 自然法則にしたがって統一されたもの」(PSW. 13) とみなし、自然科学をこうした自然認識を基礎づけていくこと、具体的には自然法則を発見することと捉えている。そして自然主義は、存在するものすべてをみずから規定するような意味での「自然」であるともなし、「意識の自然化」(PSW. 14) や「諸々の理念の自然化、したがってすべての絶対的に理想的なものや規範の自然化」(PSW. 15) を遂行する。我々は、こうした自然主義が、どのように動機づけられ

ることによって形成され、またそれゆえなにを前提としているかを探求する。それはいささか結論を先取りすることになるが、自然科学にたいして問われる「そもそも自然的な(混乱している)経験なものか、いかにして客観的に妥当する経験判断を確立するようになるのか」(PSW. 30) というような方法上の問題を、経験の次元から経験の構造を通して説明するための最初の歩みとなるであろう。以上のような方向から論議するために、我々はフッサールの晩年の労作である『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(以下『危機』と略す)を中心にして、そこで規定されているような科学の方法としての理念化 (Idealisierung) のあり方を探ることにしたい。特に我々は、本論において自然科学を規定する理念と、その理念がいかにして実現されてきたかを、フッサールが示した多様な理念のあり方を通じて考察することにする。

さしあたりまず、フッサールが示した理念の本質を規定してその各々の性質を明らかにし、続いて規定された諸本質がどのように操作されることによって科学の方法が形成されてきたかを見ることに

する。

1

我々はまず本質一般の多様なあり方について記述して、その中から精密な自然科学がいかなる本質を使用しているかを示し、それによってこの本質がいかに構築されたかを考察する手がかりとしたい。フッサールは事実性から本質性へと抽象する様式として、形式的にはそれを三種類に区分していた。すなわち領域存在論の本質、形式存在論の本質、および理念的極限としての理念的本質がそれである。

領域存在論の本質とは、具体的な経験的対象性が具えている質料の本質のことで、(Id. 28) それは我々が、日常行なっている素朴な抽象によって本質把握がなされうる。そこにおいては、ある際立たせられた「契機」が原理的に漠然としたもの、類型的なものたらしめられる。(Id. 156) 例えば交通信号を見て、「赤色」とか「丸い」という本質が把握されるわけである。この場合、「赤色」という一本質によって規定される色は、色調を持つためきわめて多様なわけであり、例えば虹の中で赤色の範囲を規定する場合、個人個人異なっているであろう。この意味でこうした事象内容を含んだ本質は、一義性をもたずあいまいで、精密性を欠いている。しかし誰しも赤色と青色とを混同しないであろう。つまり赤色は色一般という上位類の分節化において、他の色との差異を通じて規定されているわけであり、それは厳密性を保持している。

それでこのような質料の本質は、類的な普遍化(Generalisierung)

が可能で、例えば「赤色」という本質は色一般、さらに視覚的性質、そして最上位の類である感性的性質のもとに従属する。

こうした質料的領域存在論に対し、その質料的存在論すべてに共通の形式的構成を指定する存在論が、形式的存在論である。(Id. 29) それは「領域一般の空虚な形式」というあり方において、あらゆる可能的本質に適合するわけである。それは「事象内容を含んだものを純粹論理的に形式的なものへ普遍化する」(Id. 31) 操作によって得られ、先の類的普遍化とは異なり、「形式化」(Formalisierung)といわれる。例えば具体物のように、事象内容を含んだ究極的な基体を形式化すれば「空虚な或るもの一般」としての空虚な基体カテゴリーが得られる。それは事象内容を含んでいないが故にあいまいさをもたず一義的で、それゆえ精密な概念である。このような形式存在論の内に含まれるものとして、純粹論理学やあるいは抽象的な純粹数学が挙げられる。

以上のように質料と形式という区別から本質に関する二つの様式を示したが、それらとは異なった形式をもつ本質がある。例えば形態を表わすものである「ギザギザした形である」とか「波型をしている」という表現に対して、精密な幾何学的概念として定義されるような意味での「円」とか「三角形」がそれにあたる。それが理念的極限であり、それは領域の本質と同様、質料的領域に位置するが、それとは異なり精密性をもった本質である。なぜならばそれは領域本質の一つである形態の本質に対する理想極として規定されるからである。形態の本質はその極限に多かれ少なかれ近似的に接近するが、そこへと到達することは原理的に不可能なのである。形態の本

質は記述の本質として素朴な直観から直接取り出された本質だが、その理念的極限のほうは、原理的にそうした感性的直観のうちには見い出せえず、実践的な関心に基づいて構築された本質なのである。次章で示されるように、科学の方法はこうした理念的極限の形成とその操作によって成立する。

我々の課題は、こうした理念的極限としての本質がその他の本質とどのように結びつくことによって、経験の構造から科学の方法を形成してきたかを示すことであるが、さしあたり以下においては科学の方法についてのフッサールの考察を、『危機』の記述をもとにして追うことによってその準備とする。

## 2

自然科学の方法の形成についてフッサールは、『危機』の「第九節 ガリレイによる自然の数学化」の中で中心的に取り扱っている。我々はフッサールに即して、この節を主に、ガリレイが彼の思想を展開するに際して、彼が自明なものとして先取することによって彼を動機づけた理念が、いかに形成されたかを明らかにする。そしてさらにそうした遺産に何が付け加わるかによって近代的な数学的自然認識を動機づけるに至ったかを示すことにする。それゆえ我々の論述も『危機』がそうであるようにガリレイを中心にした歴史的な記述の様相を呈するようになる。『危機』書が歴史的記述を示していることについては種々論議がなされてきたが、その点に関してはここでは立ち入った説明はしない。しかしこうした歴史史を問題とすることは、フッサールにとって単なる準備的考察であったり、当

時の時代状況にもとづく外在的なエピソードであったりしたわけではない。<sup>(2)</sup> そのように考えることは現象学的還元の一契機である「動機づけの連関」の意義を捉え損なうことになる。フッサールのいわゆる後期の思想である発生的現象学において述べられた意味発生的あるいは意味の歴史性は、顕在的に現象学的態度へと移行することにおいてはじめて、意味を構成する超越論的主観性の歴史性を通して主題化されるのである。この『危機』書の第九節においてフッサールは、現象学的態度をまだ主題化してはいないが、すでに遂行した状態で歴史を考察している。しかしそれが主題化されていない以上、ここではこの歴史性の問題に関しては語る場をもたないのである。そこで我々は、史実としてではなく、理念上の人物としてのガリレイのあり方を、(Vgl. K. 58) 彼についての記述の仕方については不問に付したまま素描することにする。

### (a)

フッサールによればガリレイが自明なもののみならず、それゆえ彼の思想を動機づけていたことは「純粹幾何学や、さらに一般に言うて純粹な時空形式に関する数学が、時空形式の中に理念的に (ideal) 構築しうる純粹な形態に関して純粹な普遍妥当性をもって教えるものはすべてこの真の自然に属する」(K. 21)と規定される。すなわち真なる自然は、それ自体において数学的な合理的統一であり、この普遍学によって支配されうるという理念 (K. 19) が先取されるわけである。こうした「自然の数学化」という理念を動機づけた思考過程を再構成してみることにしよう。

我々は一般的な直観的经验において、時空形態だけに抽象的に眼

を向けることによって「物体」を経験する。(K. 22) そうした態度は、なるほど潜在的には自然主義をめざしているとみなせるが、なおそこへと至っていない。というのも規定された物体は「幾何学的に理念的な立体ではなく」、「現実には経験する物体」だからである。

(K. 22) 経験の一樣態である想像の中でその物体を変えてみたところで、それは幾何学的の立体とは異なる。「想像は感性的な形態をまたもや単なる感性的形態に変えるにすぎない。」(K. 22) そこにおいては感性的な諸形態相互が程度差によって比較されるだけであり、幾何学的な純粹な理念との比較は生じない。ここでは直観的な周囲世界が問題になっており、領域的な類型性の中で記述可能なわけである。

しかしこうした感性的な諸形態の程度差の比較の中で、実践的な関心に導かれて完全性の理想が生じてくる。そして技術の進歩とともに、この完全性の理想は常に先へと移行し、そこにおいては「繰り返し返し繰り返し」という形で考えられるかぎりの完全化の地平へと自由につき進むことによって、いたるところに極限形態が描きされ (Vorzeichnen) 決って到達されることのない不変の極としての極限形態へむかって、そのつどの完全化の系列が伸びていく」わけである。(K. 23) こうした極限形態に関心をもち、そこから新たな形態を構築することに従事するのが幾何学者なのであり、さらに時間やそれ以外の領域に対しても同様の操作をおこなうとき、純粹形態の数学者なのである。そこでは、自己所与性として直観されうる形態から直観不可能な単に思念されるだけの極限形態へと関心が移行したことになる。<sup>3)</sup> すなわち「無限ではあるが、それ自体では完結

した理念的対象性の世界が仕事場となる。」(K. 23) そして「もっぱらこの純粹な極限形態の領域にとどまる〈純粹思维〉という理念の実践をもつ」ことになる。(K. 23) 我々はこうした極限理念の特徴を後にもう一度分析することにして、科学の方法の形成を更に追うことにするが、ここでは上述した極限形態の構築に実践的な関心として関与した測定術について若干触れることにしたい。

測定術は、さしあたりは直観的な周囲世界において測量によって物を規定する方法だが、これによって感性的形態としての物に対して相互主観的に規定可能なものとして「客観性」を与えるのである。それは形、大きさ、また大きさの関係、位置の規定等に「概念」を与える。そしてまた円とか直線といった経験的な基本形態をいわゆる剛体に固定して尺度として規定し、それと他の物体の形態に相互主観的で実用的な一義的規定を与える。そしてこうした実用的な関心を純粹に理論的関心に転化させることによって純粹幾何学的思考作用へと移行していったのである。(K. 25) すなわち、そこでは基本形態を一義的に規定しうるばかりでなく、原理的にあらゆる形態を一義的に産出する可能性をもつことになる。(K. 24) つまり測定術そのものの理念化が遂行されたわけである。こうして「経験的で直観的な世界に本質的に伴う主観的把握の相対性が克服」され、いわゆる「客観性」が生ずることになる。

経験の中の感性的形態から理念的形態を構築することによって、我々は自己所与性として直観されうる世界から純粹思维の世界へ移行した。理念的形態の世界は、それ自身としては経験世界を離れることになる。しかし理念的形態という極限理念の形成にはその本来

の関心からして常に測定術と結び付いている。それゆえ測定の理想として極限形態が機能し、我々は極限形態を通して経験世界を見ることになり、測定は極限形態の近似化という形式をもつようになる。

(b)

ガリレイはこうした極限形態を主題とする幾何学や、極限形態へ近似化することによって客観性をもつ測定術を伝統として受け入れたのである。ガリレイ自身はこのような「幾何学の起源」を問うことなく、「客観性」をそのまま受容し、純粹数学を「自然」へ普遍的に適用することになる。しかも自然に対する数学の適用という自覚のないまま、自然それ自身が数学的全体的統一体であるという思想の検証というあり方で、ガリレイは自らの研究を押し進めるのである。我々はさらに時空的な形態(形式)に対する色や音といった感性的性質(内容的充実、質料)という世界に関するもう一つの側面の数学化を見るときに、両契機の連関性に関わる因果性の問題を明らかにしたい。

学以前の素朴な感性的直観において、諸物体は具体的なあり方において相互に共属し合い、物体の時空的な位置や形式、あるいは性質に関してなす変化は、偶然的でも恣意的でもなく類型性をもつてゐる(K. 28)ことが知られる。例えば我々は、たとえニュートン力学を知らなくとも、あるいはアリストテレス自然学を知らなくとも、リングは下から上へではなく上から下へ落ちることを知っている。そしてリングが落ちたのは例えば風が吹いたからであるというように、物體的な出来事の相互依存関係は、因果的な結合として経験される。このような類型性を通して我々は、経験的な全体的様式

をもつことを知る。(K. 28) 経験に関する記述はこの程度にとどめ、またその構造についての現象学的な意味での分析は現象学的還元を通してはじめて主題化されるので、ここではこれ以上立ち入らない。ただここで確認しておいたことは、「直観的な周囲世界がもつこうした普遍的因果様式は、現在、過去、未来の未知な点に関して、その周囲世界の中で仮説性を立てたり、帰納したり、予見したりすることを可能にする」(K. 28)ということである。すなわち自然科学的な認識も、学以前の経験の普遍的な因果様式をその基盤にもち、それを手がかりとして形成されるのである。

周囲世界の時空的形態を補足する色や音といった感性的性質もまた、こうした世界の一般的な様式から数学的に規定される。そしてこれによって測定という方法が、直観的世界のすべての実在的性質と実在的因果関係へと浸透することになる。なるほど、こうした感性的性質は時空的な形態のように直接数学的に規定することはできない。しかし感性的に直観される世界の契機である感性的性質もまた時空的形態と同様、「客観的な」世界を告知するものと見なされなければならない。(K. 31f) それで感性的性質を間接的に数学化する方法が見いだされる必要がある。物体に関し直接経験される感性的性質は、その物体の形態から抽象的には分離されるが、具体的には引き離せ得ない。例えば色のない延長とか、延長のない色ということは、實在物にはありえない。このように感性的性質と形態とは普遍的で具体的な因果性を存しているのである。それゆえ数学は、直接的には時空形態のみを取り扱い、感性的性質は捨象するが、このような普遍的で具体的な因果性を通じて、感性的性質もまた共に

理念化されうる可能性をもつのである。感性的性質は、形態の普通の指標として、いわば形態に從属するものであると受け取られる。すなわち「すべての特殊な感性的性質においてみずからを實として告知するものは、自明性をもつていつもすでに理念化されたものとして考えられている形態領域の出来事に数学的指標をもたねばならない」(K. 38)と考えられ、そこから「間接的数学化」の可能性が生じる。例えば、色は光の波長として決定されうるといふ考察がこれに当たる。そしてこのような可能性は、「直観の世界には日常的经验において告知されているが、しかし無限性においてはかくされている普遍的帰納性が支配しているといふ仮説」(K. 37f.)を共に生み出す。具体的な因果性自体が理念化されて「普遍的で精密な因果性」と化し、逆に経験の中にみられる具体的に個別的な因果性に先行し導くものとされる。この普遍的で理念化された因果性は、その理念化された無限性のうちに事実的形態と事実的な内容的充密な因果性」という唯一の不変形式をもつものであるといふ仮説が構築されたのである。

(c)

ガリレイはこのような仮説を自明なものとし、この因果連関を「公式」という形で数学的に表現する方法を見出した。公式は一度発見されればそこに包摂されるあらゆる個別的事例に適用され、それによつてその事例は「客観化」されうる。公式は「数の(関数的)依存関係という形での実在的依存法則を表現する」(K. 3)といふのも「測定すれば測定値としての数が与えられるが、測定量の

関数的依存関係についての一般の命題においては、特定の数ではなく数一般が与えられ、しかもそれが関数的依存関係の法則を表現する一般の命題において表現される。」(K. 43) 一般の因果関係を保持する自然法則は、このような「公式」において表現されるわけである。しかしこのような公式による表現は、その後純粋形態全領域の算術化をまねき、代数的に形式化されるようになる。こうして「幾何学の算術化」はいわば「幾何学の意味の空洞化」へいきつく。代数的計算において幾何学的意味は欠落し、その本来の意味も問われなくなる。

ガリレイは、世界が精密な因果関係をもつ存在であるといふ理念を公式という形で表現したが、こうした理念自身は一つの仮説であり、「仮説はそれが検証されるにもかかわらず、いぜんとして永遠に仮説であり続ける。」(K. 11) この場合、仮説といふのは個々の自然法則を指しているのではなく、自然法則を導き出した自然科学の方法、つまり対象としての世界の規定の仕方を意味する。この方法は、世界をみずからの方法を通してのみ見るよう一義的に規定するので、あらかじめ誤謬が排除されている。個々の自然法則は、そのつど他の新たな自然法則に乗り越えられうるが、まさに乗り越えられることによつて自然法則を規定する自然科学の方法の妥当性が検証されることになる。自然科学は、このような検証の無限の歩みであり、またいつまでも仮説であり続けるのである。そして自然科学の真理性をその起源から問うような根源的な思考は、そこにおいては問う基盤を持たず排除されている。といふのも「数学的な規定を与えられた理念性的世界」が、「唯一の現実的世界であり、現実の

知覚によって与えられ、そのつど経験され、また経験されうる世界「すなわち「生活世界」<sup>(4)</sup>とすりかわっている (K. 48f.) からで

ある。「無限に開いた可能的経験のうちにある生活世界」から完全性という一つの実践的要求に則って構築された一つの特異世界としての理念的な世界が、逆に「客観的で現実的で真の世界」として生活世界の代理をし、それをおおい隠すようになる。フッサールはこれを「理念の衣」(Ideenkleid) と呼んでいるが、それは「一つの方法に過ぎないものを真の存在だと我々に思い込ませる。」(K. 52) としてこのような客観主義は単に「物」として規定された世界にとどまらず、我々が経験する世界全て、例えば価値的なもの、あるいは心的なものにもまで適用されるのである。

我々は、自然それ自身が、数学的法則を持つ存在であるとするいわゆる自然主義の成立を辿ってきた。それは、経験の中の時空形態に関心をもち、それを領域存在論的に規定するのではなく、一義的な規定として極限理念へと向かわせる。そして具体的経験において形態に常に連関性をもつ感性的性質をこの極限理念としての形態に從属させ、間接的に数学化する。このようにして世界を数学的な存在として規定し、しかもそれを真なる存在とみなすようになるのである。

我々は、次に極限理念のあり方を更に規定することを通して、いかにして自然の数学化が可能となったかを見てみることにする。それによって自然の数学化の可能性を示すとともに、経験と数学と数学的自然科学の連関性を明らかにしたい。

### 3

前章において我々は、フッサールに基づいて自然科学の方法としての理念化を極限理念の形成から説き起こした。この章では、フッサールが述べたような諸理念との対比において極限理念を規定して、前章で記述した科学の方法のあり方を極限理念を通してみてみる。それゆえまず極限理念の基盤となった経験を再度とりあげることから始めることにする。

我々が「自然」において包括している超越的存在としての対象は、<sup>(5)</sup>経験において一挙に全面的に規定され直観されるということは原理的にありえない。それはただ不十全にしか知覚され得ない。我々がそうした超越的な対象に近づきうるのは、ただその対象の体験を通して規定していくことによるのである。ただその対象の十全的な自己所与性は、体験の限らない過程の絶対的に規定された体系としていわば統制原理として、「理念」としてのみ捉えられうるのである。この場合、統制原理としての理念は二重性をもち、対象それ自体に対しても、体験それ自体に対しても言われうる。フッサールは、超越的存在である対象自身を「無限な理念」(infinite Ideen)、内在的存在である流れとしての体験の全体的統一を「有限な理念」(finite Ideen) と規定している。(Id. 635) 体験流の全体的統一は、それ全体として十全な自己所与性をもつことはできないが、「果てしなく近似的に接近しうるような理念的極限である」がゆえに有限な理念と言われる。それに対して無限な理念は、前述したような「近似的接近が全く不可能な何らの極限でもないような理念」という意味

である。超越的対象は統握され意識されるにしても、いかなる未規定なものもその中に含まないような統握は単に思念することだけができるのである。というのも統握の本質には「経験の進行によって〈別様〉ということが含まれており、爆発崩解 (Explosion) する可能性もある」(Id. 63c) からである。対象それ自身は、経験の過程に対して統制的原理として働いているが、その過程によって規定された意味が直ちに対象へと近似的に接近しているとは言えないのである。以上述べたような二種類の理念の差異は、対象自体の総体である自然と意識の流れとしての体験という二つの領域の「所与性の様式の原理的相違」に由来するのである。(Vgl. Id. 86 ff.)

しかし我々は対象それ自体という無限な理念を経験に対する課題として受け取るのではなく、所与性としても先取することが可能で、それに基づくような学を形成することができるのである。すなわちその学は理念を学の対象とし、そしてその理念を操作することによって成立するのである。その場合その理念は、認識にとって当の対象がなお新たな規定を要求することを未決定にそのまま、(Id. 62d) 無限性という形式において規定されている。このように「本質的に動機づけられた無限性という理念は、それ自身は無限性ではない。」(Id. 331) すなわち、あらゆる可能性をそれ自身の内に含む<sup>(6)</sup>という形式において無限性という理念は既に規定されているのである。それは無限ではあるが、完結した世界を形成している。超越的存在は、こうした「無限なるもの内に伏在する理念」(K. 282) に転換しうる。

我々が本論で主題とした極限理念は、このような理念のもとに形

成された。極限理念は、「完全性」という実践的に動機づけられた理念によって、感性的形態を理念的形態へと構築したものである。

「精密性」として規定される理念的形態は、絶対的な同一性において規定し、また絶対的に同一で方法的に一義性をもつものとして規定しうる諸<sup>Plausibilitäten</sup>性<sup>Qualitäten</sup>の基体として認識される可能性をもつ。(K. 284) ここで精密概念のもつ絶対的同一性とは、「より大きいものとかより小さいものを排除するような相等しいもの」で、「互いに對して端的に代理可能」な量の一致を前提としている。(Vgl. K. 283) このような理念的形態によって規定された対象は、この理念的形態<sup>(7)</sup>によってのみ述語づけられ、それによってのみ規定される。そこでは極限理念による規定性が対象に帰属すべきものとして同一であり、他の規定性を絶対的に排除しているので、対象は同一で、未規定性は排除されるのである。(Vgl. K. 291f.) しかし対象は極限理念による述語づけという方においてのみ規定され、それ自身の同一性が保証されるので、対象自身は実は内容をもたず、形式存在論における「空虚なあるもの一般」という意味のみを保持しているのである。対象の総体としての世界が、同一なる自体存在という理念として規定されているのは、空虚化されいわずに内容を持たないからである。それゆえ世界は一義的なものとして「自然の斉一化」があら<sup>(6)</sup>じめ保証され、自然科学における帰納法が成立しうる根拠をもつ。そしてこうした方法を「自然」という一領域に留まらず別の領域への拡張する可能性が開けてくるのである。対象の形態を理念化することは、形態を極限理念として受け入れるとともに、対象自身は空虚化して形式存在論へ移行していることになる。それゆえ理念化と

いう操作は、我々の直観の領圏を離れ、純粹思惟のなかに移行することになる。(8) このような操作は感性的性質を含む全てを数学化し記号化することによって完成するが、その可能性はこのように対象自身形式化という形であらかじめ下図を描かれていたのである。存在を「無限なるもの内に伏在する理念」として規定しており、それによってその理念は「全ての可能性をみずから含む一般性の純粹な形式にしたがってアプリアリに規定できる」(K 302)のである。このような理念は、前述の超越的存在を規定した「無限な理念」を理念という形式における所与性とみなすことによって形成された「有限な理念」であり、自然科学はこの理念へと近似化するというあり方において「進歩」するのである。

## 結

我々は自然主義批判を試みたが、単なる批判ではなく、自然主義の妥当性と制約性を(意味)發生的にその基盤を通じて問うてきた。我々はそのような意図のもとに科学の方法がいかに形成されてきたかを見てきたのである。それは物体の感性的形態に関心を向け、それを極限化して理念的形態を構築して数学化するとともに、感性的形態と感性的性質との間に成立する規則関係から感性的性質を間接的に数学化した。それは理念的形態をもとにして、精密な因果関係において自然を一義的に規定することになった。そして測定値はこの理念的形態の測定値として理念的形態を理想とし、そこへと近似的に接近することが自然科学の学としてのあり方となったのである。この場合、自然的対象それ自体は理念的形態によってのみ規定され

るので、対象それ自体は内容をもたない形式存在論的な基体とされ、その一義的因果表現の基盤となったわけである。そしてこのような因果連関そのものは関数的に表現されるに及んで、全てが数的な量によって確立されるのである。それは自然を数的に表現することによって、自然それ自体が数的存在であるとする自然主義を生み出し、具体的な経験はそれへの指標として、その本来的意義は主題化されないまま問われなくなる。

以上のような我々の論議は、規定された理念が理念のあり方を通じて実践的な関心によっていかに操作されたかを示したかに過ぎない。我々はこうした理念が志向的意味としていかに構成されたかを経験を通じて考察しなければならぬ。それは明証論に基づいて超越論的主観性との相互連関の中で問うことになるが、我々はこうした問いをまさに主題化し、その問いかけへの通路を切り開いたにすぎない。

## 注

フッサールの著作からの引用の際、『厳密学としての哲学』は〈PSW〉を、フッセリアナ第三巻のいわゆる『イデー』は〈ID〉を、同じく第六巻の『危機』は〈K〉を、その略号として用いる。

(1) このような三種類の本質性の区別自身は『イデー』の第七十五節の学に対する区分に基づいている。すなわち質料的領圏に属する記述学および精密学と、こうした質料的領圏に対立する形式存在論的な学がそれである。しかし本論で後に示すように精密学は他の諸学の本質概念から構築された派生態であり、

それは『イデー』の本質論が記述的本質と形式的本質に分けられていること(第十節)からも示唆される。

(2) E. Ströker: *Geschichte und Lebenswelt als Sinnesfundament der Wissenschaften in Husserls Spätwerk*. in: *Lebenswelt und Wissenschaft in der Philosophie Edmund Husserls*, Frankfurt am Main, 1979, S. 113.

(3) フーサルはギリシャ古代数学がまだ無限性の概念に至らず、「有限的に完結しているアプリオリ」に留まっていたとしている。(K. 18f.) これは素朴な数学は極限理念に依らず、類型的形態によって成立しうることを述べている。例えば紙に描かれた円を見て、極限理念としての完全な円を思念することも可能だが、その円を通して円一般を直観し、描かれた円はその具体的な表れとみなすこともできる。古代数学は後者のような見方によって、類としての形態相互の関係を示した学と考えられる。その場合、それは常に経験可能だが、逆に経験に縛られていることとなる。Vgl. E. Ströker: *philosophische Untersuchungen zum Raum*, Frankfurt am Main, 1964, S. 216.

(4) リクルールが言うように、「生活世界は例えば知覚のような「直接的直観によって手に入れられるものではなく」、現象学的還元という廻行的問い(Rückfrage)を「迂回することによって間接的にのみ到達しうる」のであり、この廻行的問いは科学のもつ精密性を手がかりとするのではなく、「自らの基礎を自身のうちに見出し出してその基礎を合理性の基準にするという諸科学の要求を手がかりとして開始される」のである。我々はこ

のような廻行的問いをまさに始めたばかりであり、自然的態度において自然主義を批判しているにすぎず、本論で述べられた生活世界は超越論的概念ではなく、自然的態度による規定であることに注意しなければならぬ。P. Ricoeur: *Rückfrage und Reduktion der Idealität in Husserls »Krisis« und Marx' »Deutscher Ideologie«*. in: *Phänomenologie und Marxismus*. Bd. 3, Frankfurt am Main, 1978, S. 209.

(5) 超越的存在を事物対象とし、また内在的存在を体験として規定することは、渡辺二郎訳の『イデー』の訳注の中で示されたリクルールの注記に基づいている。渡辺訳『イデーII』みすず書房、一九八四年、四五六頁。

(6) Vgl. Rang: *Kausalität und Motivation*, Haag, 1973, S. 194f. ただしRangは、無限性が科学においていかに機能しているかについては十分検討していないように思われる。

(7) 以上のような考察は、ノエニス・ノエマ分析論と直ちに類比的に結びつくわけではないことに注意しなければならぬ。その分析論によれば、我々は対象自体(Gegenstand schlechthin)を知覚する場合、例えば「あれは樹だ」と意識する。その場合、その知覚内容そのものは意味として把握されているわけであり、それは「ノエマの意味」と言われ自らの内に対象への関係を含んでいる。対象自体はこうした意味による述語づけの基体で、その意味内容の「担い手」(Träger)となる。しかしそれ自体としてみれば、「全ての述語を捨象した純粋なX」として、あらゆる規定から身を退ける。しかし我々はこうした事象の記述

を、記述の意味内容として受け入れるとき、記述を通して態度の変更が生じる。すなわち「純粹なX」が、意味の担い手ではなく「空虚なあるもの一般」という意味を所有することになる。ここに超越的存在として無限な理念である対象自体が有限な理念へ変換する動機づけが示されている。ここではノエンス・ノエマ分析論から形式存在論へ移行しているのである。それゆえ再度ノエンス・ノエマ分析論から見ると次のようになる。すなわち「X」は極限理念によって述語づけられているのではなく、「空虚なあるもの一般」という意味によってのみ述語づけられているのである。つまりこの場合「X」は「空虚なあるもの一般」という意味のみを担っている。そして極限理念はこの「空虚なあるもの一般」を規定する概念として機能する。形式存在論への移行とは「空虚なあるもの一般」とそれを規定する極限理念という事態をさす。しかし本論において我々はなお自然的態度に位置しており、現象学的態度を通して始めて主題化されるノエンス・ノエマ分析論をいわば先取りしているので、以上のような論議は単に素描にしかすぎず、なお論議を要する。

(Vgl. Id. S. 82f. S. 111f. S. 301f.)

(8) 意味論に限定しているが学における直観と思惟の問題を取り扱ったものとして拙論「フッサールにおける直観の可能性について」、『倫理学』(筑波大学倫理学原論研究会) 第三号、一九八五年を参照されたい。

(すずき・こうぶん 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)